中国新聞 令和3年1月26日 火曜日 掲載

命守る人
コロナ禍の中で

夜通しの再検査も。苦にならない

広島市医師会臨床検査センター副技師長 前かをりさん

検査室で検体を手にする前さん（広島市中区の市医師会臨床検査センター）＝画像の一部を修整しています（撮影・高橋洋史）

眠りの浅い日が続いた。職場を出ると、すっかり日が昇っていたこともある。広島市の新型コロナウイルス感染者が増え、市医師会臨床検査センター（中区）に大量の検体が運ばれるようになった昨年11月。副技師長の前かをりさん(58)は連日、検査室にこもりきりだった。

検査は繊細な作業の連続だ。加える薬の量が違ったり、他の検体が混入したりすると、正しい結果が出ない。だから少しでも不審な点があれば、夜を徹して再検査した。「苦にはならなかった。その日の検査はその日のうちに終え、正しい結果を返す。そういう仕事ですから」。柔らかい口調にも強い信念がにじむ。

臨床検査技師になり30余年。専門は微生物だ。患者の血液や尿から不調を引き起こしている菌を見つける仕事にやりがいを感じてきた。だから結婚、出産を経ても辞めようとは思わなかった。「私、諦めが悪くてしつこい性格なんです。この仕事には向いているかも」と笑う。

上司の評も「とにかく仕事に誠実」。センターで7月からPCR検査をすることが決まると、責任者に選ばれた。県に借りた装置は初めて扱うものだが、準備期間は1カ月もない。マニュアルを読み込み、トレーニングに励んだ。

基本は昼3時から深夜0時まで働く。しばらくは依頼が1日100件に届かず、微生物係の技師が2人いれば十分に対応できていた。だが秋口から増え、11月半ばには1日300件を超えるように。眠れない日々が続いたのはこの頃だ。家に帰っても頭がさえて、なかなか寝付けない。検査の夢も毎日のように見た。

すると、周りが動きだした。微生物以外の検査を担う技師たちは、自分の仕事の合間に検体容器の消毒や試薬作りを担ってくれるようになった。経理、総務などの職員たちは、検体の集配を手伝ってくれる。前さんは「センターが一丸となりコロナと闘っている。それが何より心強いんです」と力を込める。

忙しくなった自分を気遣って、後押ししてくれる家族も心の支えだ。会社員の夫は以前にも増して買い出しや洗濯を引き受けるようになった。市内の病院と百貨店でそれぞれ働く娘2人も最近、率先して台所に立ってくれる。

今なお依頼が300件を超える日は続くが、前さんの表情は明るい。「検査を望む人がいる限り、1件でも多く応えたい」。検査室ではきょうも、検体が待っている。（田中美千子）

周りの「命守る人」を教えてください
記事の感想もお待ちしています
友だち登録はこちらから
houdou@chugoku-np.co.jp
命守る人の動画やこれまでの記事は中国新聞デジタルで

中国新聞社の許諾を得ています。